

ライフ
ストーリー

haruka

誰もが生きていて良かったと思える社会
—内省から政治実践へ

***自己紹介**

みなさん初めまして、法学部政治学科 2026 年卒の haruka です。西宮市出身で、日本文学と、猫とイルカが好きです。現実には悲観的になりがちですが、それでも人や社会の可能性を信じたいと思う性格です。座右の銘は「義を見てせざるは勇無きなり」です。

在学中は、政治哲学や政治思想史に関心を持ち、ゼミでは「なぜ排除は容易で、包摂は難解か」という自分なりのテーマを軸に、政治と感情の関係について学んでいました。また、「すべての人の暮らしと権利を守るために、公正な行政運営に尽力したい」という思いで挑んだ公務員試験にも無事合格し、卒業後は関西の地方公共団体に勤める予定です。

本稿は、私自身の内面的な葛藤と、そこから生まれた問い、そして政治や社会との関わりについて綴ったものです。「誰もが生きていて良かったと思える社会」とは何か。その答えを探してきた、大学時代の記録でもあります。こうした問題について、これまでじっくりと言葉にする機会があまりありませんでした。自分自身の考えを整理する意味も込めて、ここに書いてみたいと思います。以下、どうぞお付き合いください。

***セクシュアリティについて**

はじめに、私のセクシュアリティ（性のあり方）について、長年悩んでいることを書いておきたいと思います。私のセクシュアリティに名前を付けるとしたら、ざっくり言えば「レズビアン（女性として女性にのみ好意を抱く）」とか、もしくは、広く「クィア（性的マイノリティの総称）」かな、と思っています。でも私は、実はどちらもしっくり来ていないというのが正直なところです。というのも、1つの言葉で表すには、性は、あまりにも複雑だと思うのです。

私は、異性愛者ではなく、精神的な恋愛として「好き」になるのは女性です。一方で、性愛としての「好き」という感情や性的惹かれはほとんど抱きません。さらに、性愛関係を前提とした「彼女」や「付き合う」の定義など、名前の付いた関係性についても懐疑的です。親友でも、恋人でもない、けれど特別な関係性があっても良いと思ったこと、また、セクシュ

アリティに関わらずひとりで生きる選択肢もある、こういうことを考えたとき、私にとってはラベリングが難しいな、と感じました。

カテゴライズした時、そこでそのラベルらしさが思い浮かんで、ラベルだけが一人歩きして、置いていかれる気分になります。まるで、名前だけが先に走ってしまって、生身の私は後ろに取り残されるような感覚でした。それぞれのカテゴライズの中にも、さらに多様な性のあり方があるということは、ときに当事者同士のあいだでも、十分に共有されていないように感じることがあります。多数派／少数派という二元論ではなく、その間にグラデーションがあることをかき消されていることをもどかしく思っていました。そもそも、多数派といわれている人の中でも、性愛や関係性のあり方は人によって異なるはずです。

また、レズビアンである、性的少数者当事者である、ということが、生身の人間としての実態以上に、政治社会的に引き受けざるを得ない問題や歴史が重荷すぎる、とも思いました。私にとっては、それだけがアイデンティティの全てではないと思う気持ちが強かったからです。確かに、セクシュアリティは人の大事な要素ですが、私にとってはもっと素朴に、いろんな面があるうちの一面だと捉えているのです。平野啓一郎『私とは何か』（講談社、2012）の「分人主義」のような考えです。

ただ、このような考えに至るまでには、多くの時間を要しました。周囲の女子たちと恋愛話や価値観が噛み合わないという思春期を過ごした私にとって、自分とは何者か、という漠然としたアイデンティティの不安が、ずっとあったからです。

その悩みの過程で、ある先生から薦められた、掛札悠子『「レズビアン」である、ということ』（河出書房新社、1992）を読みました。レズビアンという名付けを引き受けて表明することで、みずからの生の存在表明になり、異性愛規範や家父長制という生きづらさの仕組みに、ラディカルに異議を申し立てるのだという、本書の主張に、社会的な役割が与えられたような気がしました。当時の私は、本書を読んだ多くの当事者たちと同様に、確かに、自己を肯定されたような、救われたような気持ちになりました。

このように、自己理解に苦戦しながら、もやもやぐるぐると答えのな

いことを考えています。いまでも曖昧なままですが、それもひっくるめて私なのだと思うようになったという意味では、落ち着いたとも言えます。

何がきっかけで自分のセクシュアリティを自覚したのか、と聞かれたことがあります、「色々考えながら、徐々に」というのが私の答えです。カテゴライズの名前を見つけた日から当事者になる、というわけでもないですから。名前がつくことでの安心感や社会に可視化されるメリット、そしてこれまでの解放運動の歴史があることは重々承知していますが、私にとっては、自分にのしかかる悩みの種でもありました。

以上が、私のセクシュアリティについての考えです。この考えを経て、そもそも、性のあり方やカテゴライズの有無を超えて、すべての人が生きやすい公正な世の中であつたらいいのに、と、現実が決してそうはなっていないからこそ、考え始めるようになりました。

***生きづらさ**

そんな私には、これまでの22年間の人生の中で、「女性としての生きづらさ」に直面する機会が度々ありました。なかでも、私の人生に強く影響した一連の出来事について、書きたいと思います。家庭環境についてです。

私の父は、いわゆる「ネトウヨ（ネット右翼）」的な思想の持主で、男尊女卑はもちろん、弱者に対しても攻撃的です。「女性は子供を産む機械」「30を超えたら子宮摘出」という主張の政治家らや、性的マイノリティや少数民族について「生産性がない」「同じ空気を吸っているだけでも気分が悪くなる」と主張し法務当局から「人権侵犯」と認定された政治家など、差別主義者を熱心に支持していることを、娘である私に突き付けるのです。

高校時代には、こうした父と政治的な議論をするようになり、激しく対立するようになりました。私の性については家族には話していませんが、政治社会的な話題として「同性婚」「女性の人権」「性的少数者」などが上がった際に、意見が対立し、暴言を吐かれることが多くありました。

例えば、私が「将来は結婚したくない。子供も産みたくない。（本当は

したくても出来ない、というのが真意ですが)」と言った際、「そんな奴は社会の役に立たない。お前みたいな奴のせいで少子化が進む。俺が女ならバコバコ産んでやる。」と言われたり、テレビで偶然 LGBTQ について扱われていた際、「なにが LGBT や。そんなのクソだ。こういう奴らのせいで日本国が悪くなる。日本から出ていくべきだ。」と言われたりしました。その他のトピックでの対立も含め、暴言でねじ伏せられ、泣かされることが悔しかったことがきっかけで、自分なりに広く政治について勉強するようになりました。経済、社会保障、外交、安全保障、などです。現在でも、父とは一触即発で激論になることもあります。

ですが、そんな父も、実は生きづらさを抱えているのだということに、後に気付いたことがきっかけで、絶望させられたことは数知れませんが、それでも、父のような人を「愚民」や「敵」として切り捨ててしまうことは、違うのではないかなと思うようになりました。たとえ分かり合えなくても、この国に生きる者なのだから、自己責任ではなく、誰もが生きていてよかったと思えるように、社会の公正さは追求されるべきだという思いは強まっていきました。

***誰もが生きやすい社会**

私自身、家庭の中でも社会の中でも、「どこに生まれるか」「誰のもとに生まれるか」で人生があまりにも左右される現実、強い違和感を抱いてきました。私が「公正さ」を重視する理由には、政治哲学の文脈で学んだ、哲学者ジョン・ロールズの提示した「無知のヴェール」という考え方が根底にあります。「無知のヴェール」とは、社会の正義を考えるための思考実験であり、人々が社会のルールを決める際に、自分がその社会でどのような立場に置かれるのか（貧富や才能、社会的地位など）を一切知らない状態を指します。

この条件の下では、誰もが最も不利な立場に置かれる可能性を考慮して、最低限の状態が過酷にならない社会制度を選ぶと考えられるのです。ロールズは、このようにして選ばれる原理こそが、公正な社会を支える正義原理であると主張しています。（中山竜一『二十世紀の法思想』（岩波書

店,2000) p106-107 参考。)

これは、特定の善や価値観を押しつけるのではなく、立場の違いを前提にしながら社会を成り立たせようとする考え方でもあります。これをもとに私は、誰も好きで弱者になるのではないし、そんな「ガチャ」のような運要素で人生が決まる不安な社会ではなく、「何があっても心配しなくていい」国こそ、真に目指すべき社会の姿だと考えるようになったのです。そしてそれは、行政にしかできないことだと思いました。

***私の政治実践**

こうした思考を頭の中だけで完結させず、何か行動に移したい、と思うようになった私は、性的マイノリティも含め、あらゆる人が生きやすい社会にするために、自分にできることは何か、考えました。まずは、排除の連鎖に抗する可能性として「公共」をいかに立て直し得るかという問題意識をもち、公共を単一的な価値や同質性に還元するのではなく、「複数性」を前提としたものとして捉え直す必要があると考え、議会傍聴から始め、行政へアクションを起こす方法を模索しました。

そこから、地方行政の共通指標になりつつある SDGs の「誰ひとり取り残さない」という理念に着目し、行政を巻き込んだプロジェクトを立ち上げようと思いました。17ある個別のゴールもそれぞれが重要ではありますが、それらすべてを包括する、根底の理念が示す「排除ではなく包摂が必要だ」という方向性に、地域から向いていくことで少しずつ社会を動かしていきたいと考えたのでした。

その後、兵庫県 SDGs 推進課の学生プロジェクトに参加した経験から着想を得て、地元である西宮市にも直談判をし、市の事業として、市内大学生とともに市長に対し政策提言をする SDGs プロジェクトを立ち上げました。

また、個別の 이슈 も当然重要なため、性的マイノリティ当事者としても、当事者の人権擁護を目的とした NPO 団体に所属し、大阪や兵庫の小学生や中高生、または教職員向けに出前授業を行う講師活動にも力を入れました。

その講演では、性的マイノリティの存在や人権侵害の現実を可視化し、差別や無意識の偏見を撤廃することを目指すことはもちろん、その場限りの「特別な話」や「受け入れてね」という雑な理解に終わらぬように工夫を凝らしています。より本質的な、異なる他者と同じ社会で共に生きるために、包摂の重要性を説くことも重視しています。

ちなみに、私自身が性的マイノリティ当事者であることを、限定的ではありますが人前で表明し、活動するきっかけになった背景には、本学院の人権教育研究室が主催する「KG レインボーウィーク」がありました。23年～24年、実行委員会に所属し、企画を担当した際に得た連帯の経験が、その後にいきています。

ところで、なぜ、マイノリティなど弱者の人権を守り、包摂を目指すことが、マイノリティだけでない、すべての人が生きやすい、公正な社会の実現のために重要なのか。「多様性」とどう向き合うのか。その鍵となり、活動の執念にも繋がった考えには、次に紹介する3冊の本から受けた影響がありました。

***分かり合えなくても**

- ① ブレイディみかこ『他者の靴を履く』(文藝春秋,2024)
- ② 岩渕功一『多様性とどう向き合うか』(岩波書店,2025)
- ③ 藤田早苗『武器としての国際人権』(集英社,2022)

まず、①でブレイディみかこ氏は、英語の「エンパシー」を「他者の靴を履く」と解し提唱しています。分かり合えない他者と、それでも「この国に生きる者」同士として、共生していくという、綺麗事ではない「多様性」を生きていく上で、その分かり合えない他者の靴を履くという視点です。他者の靴は、サイズも形も質感も何もかもが違って履き心地が悪いですが、それでも、自分とは違う理念や信念を持つ人のことを想像してみる、主体的な力のことを示しているのです。

そして、②では、多様性や包摂を「好き・嫌い」「共感できるか」といった個人的感情の問題に還元することが、差別や不平等という制度的・構造

的問題を見えにくくし、社会的公正を遠ざける危険を指摘されています。その上で、その差異が差別や不平等と結びついている場合に、それを是正する社会的公正を支持できるかどうかが重要なのだとされています。

さらに、差別や不平等を「自分ごと」として考えるためには社会的想像力が不可欠であり、誰もが同じ社会の当事者であるという認識が重要であると、「共感」を感情的な同調ではなく、認知的理解と想像力として再定義し、感情的共鳴がなくとも社会的公正に異議を唱え、公正に向かう思考と行為を選ぶことが可能だと示しています。

つまり、①の「他者の靴を履く」という、他者の考えや感情を想像する認知的エンパシーの文脈と、②の認知的想像力としての共感力とは連続して理解でき、これによって、他者が立たされている社会的条件、制度、歴史の重みを、自分の身体感覚に引き寄せて考えようとすることで、不快さや違和感を伴うかもしれないが、だからこそ思考を停止せず、公正という基準に立ち戻る契機となるのではないかという考えに至りました。

また、なぜ弱者の人権問題が、「直接自分には関係ない」のではなく、すべての人に関連し、「自分ごと」と捉えることが重要なのかについては、③で藤田早苗氏が、人権問題として普遍的に関連していることを、入管問題の実例をもとに次のように指摘しています。

“このような外国人の人権をないがしろにする国が、たとえば女性や障害のある人、生活困窮者、性的マイノリティなど、社会的な弱者やマイノリティの人権を尊重するだろうか。これは、人権意識とコミットメントの問題で、その国の人権保障レベルのバロメーターといえるのではないか。すべての人権問題についてもいえるが、これは当事者以外の人の人権とも無関係ではないはずだ。”（③, p177-178 より引用。）

このように、国などの行政が、誰かの人権を守るか守らないかという問題は、すべての人の身に降りかかり得る問題だという、ことの重要さに迫ることができたのです。だからこそ、私と父のように、政治的に分かり合えないとしても、たとえ差別主義者でも、この国に生きる者として、共に生きているのだと気づきました。

そして「無知のヴェール」で示されたように、どのような人であっても、

「生きていて良かった」と思えるように、真に公正な社会の実現を目指すのだという「意志」を問う必要があるのだという考えにまとまったのでした。

***さいごに**

思考のプロセスについての話で長くなりましたが、私はこれからも、愚直な生身の人間として、社会をより良くすることを諦めずに、生きていきたいと思います。本稿が、なにかアクションを起こす際のヒントになることが出来たら幸いです。

もし、これを読んでくださったあなたがセクマイ当事者だったり、あるいはかつての私のように、カテゴライズそのものに悩んでいたりしたら、こういう人もいるんだな、くらいに、少しでも勇気づけられるものになれば嬉しいです。私たちは微力ではあっても決して無力ではありません。共に生きていきましょう。